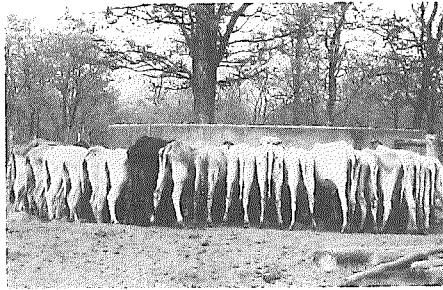


南部アフリカ行

著者	原口 武彦
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アフリカレポート
発行年	1992-09
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00008584

南部



早ばつで痩せ細った肉牛(ジンバブエ)

アフリカ行

原口 武彦

はじめに

本年6月、通産省の受託調査で思いがけず南部アフリカのジンバブエと南アフリカ共和国を訪問する機会を与えられた。思いがけずというのは、アジア経済研究所でアフリカ研究に従事し始めてからかれこれ30年になるが、仏語圏西アフリカを専ら担当してきた関係で、アジア経済研究所本来の仕事ではアフリカといっても西アフリカ以外の国々を訪問する機会はほとんどなかったからである。今回の南部アフリカ行も、私にとっては初めての体験であった。同じアフリカでも西と南部では、当然のことながら、大分様相が異なっている。感受性の鋭敏さなど期待できる年齢ではないが、それでもこれまで西アフリカに慣れ親しんできたものにとって、はじめて足を踏み入れた南部アフリカの印象は、それなりに新鮮であった。同じアフリカといえどもかくも違うものかと改めて感じいった次第である。以下は、この疑似西アフリカ人の南部アフリカ旅行印象記である。

1 「アフリカ」がない

ロンドン経由でガトウィック空港からジンバブエの首都ハラレ行きのジンバブエ航空の直行便に

乗り込んだのだが、どうも勝手がちがう。いつもパリからアビジャン行きUTAやエール・アフリックの機内に入ると、「ウーン、またきたんだ」とすでにアフリカ入りした気分させられるのだがそれが無い。乗客にアフリカ人の数が少なく、しかも彼らはスーツ姿や洋装で、西アフリカのイスラム教徒のブーブー姿は見あたらない。よくも機内にこれほど持ち込めたものだと思うほどの荷物をかかえて乗り込んでくるパーニュ姿の巨漢おぼさんの姿もない。洋装のスチュワーデスの肌の色も、混血なのだろうか色浅く、その仕草もよくいえば垢抜けていてヨーロッパ的である。

以来、4週間たらずの旅行中、私が西アフリカで慣れ親しんできた「アフリカ」には一度も出会えなかった。ハラレ空港についてまずクラブに降り立ったとき、例のなまあたたかいしめり気を含んだ空気がズボンのスズからしのびこんでこない。空港のポーター氏が紺色のVネックのセーター姿であったことも今は真冬のジンバブエの気候を考えれば当然かもしれないが、奇異に感じられた。町行く婦人の姿も、毛糸の帽子、カーディガン、スカート姿がほとんどだった。あえていえば、赤や黄色といった服装の原色好みにアフリカを感じさせられたくらいである。調査のインタビュー相手として登場したジンバブエ人たちもそのほとんどがスーツにネクタイ、みな紳士的でおとなし

い感じがした。雄弁に語り、私に体力負けを感じさせるほどの迫力の持ち主は、20数人中わずかに1人2人だった。ホテルの従業員も、よく訓練されているのであろう、すきのない職業人であった。アフリカ音楽が聞こえてくると、コーヒーを運びながらつい軽く腰でリズムをきざんでしまうなどという仕草は彼らからは想像できなかった。オープン・マーケットも訪問してみた。午後だったこともあろうが、ここにもアビジャンの市場のあの喧噪はなかった。

2 英国とフランス

この旅行中、自分にとってなじみ深い「アフリカ」を見出すことができずとまどう私に印象深かったのは、南部アフリカにおける英国の存在であった。

ハラレ空港からホテルへの道中、空気が澄んでかわいているせいか、目をつきさすような鋭い光を放つ朝日に照らしだされた風景をみて驚いた。そこには「アフリカ」がないばかりか、10数時間前、ロンドンからガトウィック空港に向かった時、車から眺めたそれとほとんど同じ風景が展開する。広大な草原のそこそこに木立に囲まれた広い緑の芝生の中の赤屋根。ちがいをいえばアフリカの太陽という照明の強さと自動車道路に渡されたジンバブエ独立記念のコンクリートのアーチだけだった。

着いたホテルのドアマンは、ロンドンの古式ゆかしきホテルのそれとおなじように、ベージュ色のシルクハットにタキシード。ホテル内のレストランのボーイは、白色の詰襟姿で腰には赤色の帯をまきつけている。飲み物係りはその上に緑地に黄色の文字で「Beverage」と書いたたすき姿である。私たちの宿泊したホテルは、このジンバブエ

という土地で生成・発展した入植者資本が経営しているということで、そのせいかもしれないが、ケニアの植民地時代を描いたアメリカ映画「愛と哀しみの果て」(Out of Africa) を彷彿させる雰囲気である。

ハラレ滞在中のわれわれ調査団のインタビュー相手も、官庁関係、政府系機関(そこでもジンバブエ生まれの白人が2~3人いた)をのぞけば業界団体、銀行、企業などでは、そのほとんどが白人であった。近代的なビルが立ち並ぶハラレの中心街は、アビジャンよりもはるかに広大で、今日なおジンバブエ全土で10万人在住しているという白人植民者によって維持されている英国の飛び地であるといつてよい。コートジボワールの場合、独立後もウフェ・ボワニ政権は親仏的でフランスの影響を強く残しているといわれるが、ジンバブエとはくらべものにならない。コートジボワールにはそこにフランスの飛び地をつくりだせるほどの植民者が存在しなかったことが第1の理由であろう。でも、たとえフランスがジンバブエに対する英国ほどに植民者を送り込んだとしても、これほど完璧に自分の文化の飛び地を築き上げることはできなかったろう。フランスだったら良くも悪くもやはり現地アフリカを知らぬ間に吸い込んでしまい両者は相互浸透してしまったのではないだろうか。ところが、ハラレは「アフリカ」を全くよせつけず、英国そのものの飛び地として存在しているようにみえるのである。英国はアフリカに無関心であったわけではない。それどころかアフリカに対する深い理解と豊富な知識の蓄積があることは否定すべくもない。しかしそれはあくまで他者としてのそれである。自己と他者との境界はどこまで理解が進んでも厳然として存在し、他者は決して自己の世界に浸透してこない。これが一時代を画した世界の管理職の孤高の精神というものだろう

か。

3 英国人入植者

独立後10年以上を経た今日でも、鉱工業はもとよりこの国の農畜産業もその中核的担い手は、英国系の入植者である。農・放牧地の約40%はわずかに4000戸あまりの英国系入植者の個人ないしは企業的手中にあり、31万人に達するアフリカ人農業労働者を雇用して、大規模な機械化農業が展開されている。その広大な土地は、植民地体制のもと1930年の土地配分法にもとづいて英国系入植者に配分されたものである。

ただし本年3月、国家がその必要を認めた場合、これらの土地をほとんど強制的に接収しうる権限を政府に付与する土地収用法がジンバブエ国会で成立した。そしてわれわれのハラレ滞在中に、この法律にもとづく土地接収の第一弾として約6800ヘクタールの農地接収が発表された。

本年の大旱ばつの被害状況を視察するため、南部のマシング市周辺の農牧地帯を訪れ、われわれはそこでこの土地収用法成立に先行き不安を感じながら旱ばつの善後策に追われている白人農場主の何人かと面談することができた。

全コースの案内役をかってわれわれのジープに同乗してくれたのは、この地方の白人農場主団体の支部長をつとめる40代半ばの白人農場主H氏であった。

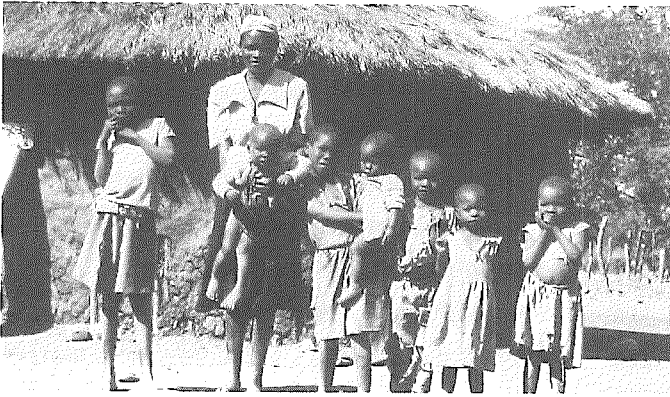
平年時の0.6%の水位しかなく水面をはるかにせばめつつもなお広大な、ジンバブエ最大の貯水ダム・ムティリクウィ湖(旧名カイル湖)、完全に干上がった灌漑水路、やせおとろえ骨と皮ばかりになった肉牛の群れ、成長なかばに立ち枯れした広大な砂糖きび畑。しかし私には目の前の状況と比較すべき平年時のイメージがないためか、新聞の早

ばつ報道ほどに、被害の甚大さを実感できなかった。立ち枯れとはいえ金色のじゅうたんを敷き詰めたような砂糖きび畑の広大さには、視角的にはある種の豊かさを感じさせられてしまった。

白人農場主の代表たちとの昼食会が長引いて、マシング市のホテルへの帰途についた頃には、はや日がかたむきかけていた。西空はまことにあざやかに夕焼けし、さらに赤味をましていく分、あたりはどんどん薄暗くなってきた。にもかかわらず、ふたたびH氏は脇道にそれて、自分の父親が中心になって建設したという貯水ダムや灌漑水路を案内してくれた。真つ暗闇の中、われわれをホテルに送り届けた彼は一服する間もなく愛用の白色のベンツに乗りかえ、そこから80キロメートルもあるという自分の農場に向かって闇の中に消えていった。ベンツとはいえ20年以上の年代もので、そのオートバイのようなエンジン音は、彼に対するわれわれの感謝の念をさらに高めさせた。

植民地体制の庇護のもととはいえ、この広大な原野を農牧地にかえていった彼らのエネルギーには圧倒される。ハラレでのインタビューで大規模農場主団体の代表は、現在の英国政府の対ジンバブエ政策を批判して「植民地主義者」ときめつけていた。自分たちは入植者ではあっても植民地主義者ではないということであろう。

翌日は、政府が植民者から合意の上で買収した農地にアフリカ人農民を入植させたいいわゆるリセットメントの一つを訪問した。円形の日干レングづくり、わら屋根の入植農民の家をのぞかせてもらった。30代の人よさそうな夫婦で、記念撮影をということで家の前に並んだ子供の数は7人。さらにもう1人、町の寄宿制の中学にかよっていて不在の長男がいるという。カメラの容量をはみだすと思ったのか父親はわきにのき、母親と子供たちだけがカメラの前に並んだ。子供たちの服装



リセトルメントの農民一家



ハラレの中心街

からみるかぎり、入植農家の生活はきびしそうだ。4000戸の大規模農場に雇用されている賃金労働者の生活水準は、この入植農家を下回るとはおもえない。大農園を接収してそこにアフリカ人農民を入植させるリセトルメント計画は、資本を労働におきかえ、より労働集約的な農業を行なうことによって、以前より少しは多くのアフリカ人農民をその農地は吸収し、扶養できるようになるかもしれない。しかしそれは砂に水をまくような結果におわらないともかぎらない。

土地収用法は成立したものの国全体の農業生産力の維持という観点からすると、政府はこの伝家の宝刀をどのように使用していくべきか、むずかしいところだろう。

4 ジンバブエのアフリカ人

植民地時代を通じて築き上げられた「英国の完璧な飛び地」に日々接して生きてきたジンバブエのアフリカ人は、どのようなかたちで自らのアフリカ人性を維持してきたのだろうか。英国そのものが間近に存在しているような状況で、彼らはその服装をみても外面的にはほぼ完全に西欧化して

しまったように見える。そして彼らのアフリカ人性はより精神的な象的水準で維持されてきたといえるのではなかろうか。

それを感じさせられたのは、彼らの言語の発展ぶりである。ジンバブエという国名は、「石の家」つまりあの有名な石の遺跡を意味しているショナ語である。国民が大小60の部族から構成されている西アフリカのコートジボワールにくらべて、この国の部族構成は複雑ではなく、ショナ人が国民の75%を占め、これに南部のンデベレ人19%を加えれば国民の94%を占めることになる。テレビ番組でも毎夕6時から、ショナ語とンデベレ語によるニュース番組が設けられている。コートジボワールが13部族語を選んで各語、週一回の同様の番組を設けているのとは大違いである。アナウンサーもコートジボワールのようにその部族固有の衣装をまとうことなく、スーツ姿、ブラウス姿である。本屋ではショナ語の文学作品がかなりのスペースを占めている。スーパーマーケットの荷物預かり所には、英語と並んでショナ語とンデベレ語の表示が掲げられていた。

ショナ人にくらべ、ンデベレ人は少数派だが南西部の都市ブラワヨを中心に、国境をこえ南ア共



南アフリカの首都プレトリア



ソエトの単身者用長屋群(後方)

和国にも多数、居住している。ジンバブエの国民がこの二つの有力な部族によって構成されていることは、この国のアフリカ人の一体性の形成に難題を課しているように思える。1930年代の英国人入植者との闘争においてマルクス・レーニン主義というイデオロギーに精神的なよりどころを求めなければならなかった理由の一つはここにあったといえよう。また独立後におけるムガベ現大統領とンコモ現副大統領との主導権争いも、シヨナ対ンデベレの主導権争いという様相を呈さざるをえなかった。一般に独立後のジンバブエ政府が掲げた社会主義路線は、実践をともなわない一つの「レトリック」と一部ではみなされているが、このレトリックを必要とさせた状況は、圧倒的な経済力を有する英国系植民者の存在とアフリカ人内部におけるシヨナとンデベレの対立関係であったといえよう。90年代に入ってジンバブエ政府は世銀の構造調整をうけいれ、自由主義経済の方向に旋回しつつあるが、それでも今日なお政府要人に対して新聞がCde (Comrade, 「同志」の略) という敬称を付しているのも単なる80年代の名残とはいえない。ジンバブエのアフリカ人が英国人入植者に対してアフリカ人としての連帯を維持したいという

願いがこめられているようにもおもえてくる。

5 ソエト

われわれはジンバブエ調査のあと、わずか5日間であったが南アフリカ共和国のヨハネスブルグ、プレトリア、ダーバンに立ち寄った。

ヨハネスブルグの超高層ビルが立ち並ぶ繁華街を治安がきわめて悪くなっているからと脅かされ、こわごわ散歩し、郊外のアフリカ人居住区ソエトを見学して思った。ハラレはヨハネスの、チトングエザ(ハラレ郊外のアフリカ人居住区)はソエトの縮小版で、その原型はこれなのだ。南ア共和国の構図がそのままジンバブエにもちこまれているのだ。

そして何よりも驚いたのは、ソエト訪問が外国人観光客のための一つの観光コースになっていることであった。観光バスを利用することはいささか調査員の沽券にかかわるが、より安く安全なこの方法を選択した。

観光バスといってもマイクロ・バスで、われわれ(3人)以外の客は高校生ぐらいの娘を連れた中年の白人夫婦だけであった。運転手兼ガイド氏は、運転をしながらときどきうしろをふりむいて説明

し、われわれは少々ハラハラしながら耳を傾けた。「1904年に建設がはじまったこのソエトには、今日、100平方キロメートルの土地に400万人のアフリカ人が住んでいます」。町の入り口には列車にかわって今やヨハネスとの交通手段の王者となったマイクロバスが発着する大きなターミナルがある。

ソエトに建設されている規格的な家屋は、レンガづくりのせいかな思ったより、少なくともハラレ郊外のチトングエザのそれよりもはるかに広く、立派であった。なにしろチトングエザのものは、わずか6畳ぐらいの土間が二つあるだけで、経済性ということもあろうが広大な土地にどうしてこんな小さなマッチ箱みたいな集団住宅を建設したのか理解しかねるほどであった。よくしたものでこれだけ余裕のある集合住宅を建設すれば、その余裕をねらってスラムが発生し巢喰うことになる。そんなスラムの簡易トイレの前にバスをとめ、ガイド氏は「危険はありません。どうぞ自由に写真をおとりください」という。

スカンジナビア諸国からの寄付金で建設されたというマンデラ邸もコースに入っていた。小高い丘の中腹にかなり広大な敷地を掘削いして、ガラスをふんだんに使ったモダンな邸宅である。マンデラ邸がほどよく見渡せる地点でバスを降ろされた。群がってきた子供たちの写真をとった白人

観光客が、子供にキャンディーを与えようとしているのをめざとく発見したガイド氏は注意した。

「子供にものを与えないでください。それは子供たちをだめにしてしまうから」。

反アパルトヘイト運動の犠牲者をまつた石碑。その上におおいかぶさるように、アフリカ人の少年がコーラを飲み干そうとしている写真の大きな広告板がたてられているのは、なんともおちつかない感じがした。

全長数百メートルもあろうか、うなぎの寝床のような横長の単身者用長屋住宅が、丘の中腹に段々状に立ち並んでいるのにはどぎもをぬかれた。1万4000人の単身出稼ぎ者が居住しているという。雨風をしのぐという機能以外はすべてを剝奪され、ただひたすら画一的に整然と横たわっているその巨大な単身者用長屋住宅が見渡せる向い側の丘は、人よんでソエトのビバリーヒルズ。新興のアフリカ人中産階級の人々の邸宅が集まっている。そこにバスをとめガイド氏は、目の前の邸宅がうちの会社の社長の家だと紹介し、南ア共和国を一日も早く人種差別のない国として再生させ発展させることがわれわれの夢であると演説し、ソエト観光をしめくくったのだった。考えてみれば、私の職業ももっぱら日本人を相手にしたアフリカ案内業の一つなのだ。

(はらぐち・たけひこ／アフリカ総合研究プロジェクト・チーム)